

欠落

原書クレジット(長文ながらすべて収録)

Original Concept and Design: Rob Boyle, Brian Cross
Writing and Design: Lars Blumenstein, Rob Boyle, Brian Cross, Jack Graham, John Snead
Additional Writing: Bruce Baugh, Randall N. Bills, Davidson Cole, Tobias Wolter
Editing: Rob Boyle, Jason Hardy, Michelle Lyons
Development: Rob Boyle
Line Developer: Rob Boyle
Art Direction: Randall N. Bills, Rob Boyle, Brent Evans, Mike Vaillancourt
Cover Art: Stephan Martinieri
Interior Art: Justin Albers, Rich Anderson, Adam Bain, Davi Blight, Leanne Buckley, Robin Chyo, Daniel Clarke, Paul Davies, Nathan Geppert, Zachary Graves, Tariq Hassan, Thomas Jung, Sergey Kondratovich, Sean McMurchy, Dug Nation, Ben Newman, Justin Oaksford, Efrem Palacios, Sacha-Mikhail Roberts, Silver Saaramael, Daniel Stultz, Viktor Titov, Alexandre Tuis, Bruno Werneck, and Dr. CM Wong (Opus Artz Studio)
Graphic Design and Layout: Adam Jury, Mike Vaillancourt
Faction Logos: Michaela Eaves, Jack Graham, Hal Mangold, Adam Jury
Indexing: Rita Tatum
Additional Advice and Input: Robert Derie, Adam Jury, Sally Kats, Christian Lonsing, Aaron Pavao, Andrew Peregrine, Kelly Ramsey, Malcolm Shepard, Marc Szodruch
Science Advice: Brian Graham, Matthew Hare, Ben Hyink, Mike Miller
Playtesting and Proofreading: Chris Adkins, Sean Beeb, Laura Bienz, Echo Boyle, Berianne Bramman, Chuck Burhanna, C. Byrne, Nathaniel Dean, Joe Firrantello, Nik Gianozakos, Sven Gorny, Björn Gramatke, Aaron Grossman, Neil Hamre, Matthew Hare, Kristen Hartmann, Ken Horner, Dominique Immora, Stephen Jarjoura, Lorien Jasny, Jan-Hendrik Kalusche, Austin Karpola, Robert Kyle, Tony Lee, Heather Lozier, Jürgen Mayer, Darlene Morgan, Trey Palmer, Matt Phillips, Aaron Pollyea, Melissa Rapp, Jan Rüter, Björn Schmidt, Michael Schulz, Brandie Tarvin, Kevin Tyska, Liam Ward, Charles Wilson, Kevin Wortman,そして Gen Con 2008 でのゲームに参加してくださったり私たちのオンライン・フォーラムにエラッタを提供してくれたりした方全員
Musical Inspiration: Geomatic (Blue Beam),

Memmaker (How to Enlist in a Robot Uprising), Monstrum Sepsis (Movement)
献辞:まず、時間や労力やアイデアや資金の提供者から完成品を手にし、読み、遊ぶ人全員まで、『Eclipse Phase』を実現させた人々に。このゲームはあなたたちによるあなたたちのためのものです。次に、私の人生における大切な人であり、本書の執筆とそのテーマである死の克服の過程で亡くなった、祖母とアンドレアへ。こうした悲劇的な喪失が避けられる日が、いつか訪れると願っています。第三に、このプロジェクトの楽しい仲間である息子のエコーへ。そして最後に夢想家たち、特に、今ここから素晴らしい未来をもたらそうとしている、無政府主義者とトランスヒューマニストへ、本書を捧げます。 Rob Boyle

Third Printing (first corrected printing),
by Posthuman Studios
contact us at info@posthumanstudios.com
or via <http://eclipsephase.com>

or search your favorite social network for:
“Eclipse Phase” or “Posthuman Studios”
Posthuman Studios is: Rob Boyle, Brian Cross,
Adam Jury

Creative Commons License; Some Rights Reserved.

This work is licensed under the Creative Commons Attribution-Noncommercial-Share Alike 3.0 Unported License.

To view a copy of this license, visit:

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>
or send a letter to: Creative Commons, 171 Second Street, Suite 300, San Francisco, California, 94105, USA.
(What this means is that you are free to copy, share, and remix the text and artwork within this book under the following conditions: 1) you do so only for noncommercial purposes; 2) you attribute Posthuman Studios; 3) you license any derivatives under the same license. For specific details, appropriate credits, and updates/changes to this license, please see: <http://eclipsephase.com/ccllicense>)

翻訳クレジット

翻訳: Janus (janus@saturn.wak2.jp)

Ver 1.1

これは Posthuman Studios の著作物『Eclipse Phase Core Rulebook』の一章『Lack』の翻訳です。
またクリエイティブ・コモンズ表示-非営利-継承 2.1 日本ライセンスの対象です。使用許諾条件については <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/> を参照してください。

「日付は？」

言葉が新しい声帯を穿ち、渴いた喉から絞り出される。再着用から数分間はいつもそうだが、今度もぶっくら棒な口調になった。言葉はざらついて不明瞭なつぶやきだったが、声の音程は高い。間違いなくバイオモーフで、今度の性別は女だ。最初の数秒でもこれくらいはわかる。どんなモデルかはまだつかめないが、また身動きできるようになればすぐにわかる。またフルーだろう。

安置台は堅い。白い合成素材できれいに包まれた冷たい金属でしかない。企業の人形館ではお馴染みの設備だ。肌からしみる寒気が骨を包み込む。

目の前には皮質処理員が突っ立っていて、時々視線を合わせつつ「おかえりなさい」スマイルをまき散らしている。そしてスマイルをやめ、独りよがりな退屈した表情で「意識を確認」と言った。質問した以上は意識が戻ったのは明らかかなはずだが、こいつは手続きに従順だった。連中はみんなそうだ。企業の肉体バンクは社員が自分自身のことについて考えられないよう服従心ががんじがらめにしている。質問をもう一度つぶやいた。「日付は？」

「3月11日」

「<大崩壊>から何年後？」

「本気で聞いているのか？」

俺はパラノイドだ。そう。肉体バンクの安置台に戻るたび、今年が何年かを知る必要がある。パラノイアは現在のトランスヒューマンの宿痾の一つにすぎない。

もう一度口を開く前に、新しい袖のメッシュ接続からデータを取ろうとする。ついてない。袖の技術者に今年が何年かを知るの、いつまでたっても恥ずかしい。まるで自分がアマチュアみたいな気になるが、この状況ではどう考えてもやむを得ないから、強気に出る。ハードに。

「いいから答えろ」

企業の怠け者は、狂人を見るような眼をしてから答える。「ああ・・・崩壊歴10年だ。そんなに長く死んでたわけじゃない。前回のバックアップは・・・」

そして情報を内視で表示させる。

「14日7時間前だ」

一瞬ではわからなかったが、その意味を理解すると心にしこりが残る。自分の時間が失われるのは何度経験してもショックだ。二週間。失われた。俺という存在から完全に消去された。二週間前に、別のモーフを着用していた別の俺がいた。任務があり、その途中で死んだ。分かっているのはそれが全てだ。その二週間で失わないでいるための皮質スタックを死体から回収するのにファイアウォールが失敗したのか、あるいはその時間を消し去る事を奴らが選んだのか。だが正直な話、どっちにしても別の俺が動き回って俺の知らないことをやるよりはマシだ。自分自身を複製してあちこちにばら撒くチョー人類もいるが、俺としては遠慮している。この宇宙に放たれたサヴァは、一人だけでも充分惨めだ。

くそ。頭が不機嫌な領域に迷い込んでいる。再装着の直後はいつもそうだ。物理的な文脈が必要だ。何か、意

識を集中できるものが。両手を目の前に掲げると、両腕が二トンの岩を詰めた袋みたいに重い。指は細長く、拳にはタコができていて傷だらけで不格好だ。パンチを何度も放ち、拳をあごや金属や肉にぶつけた結果なのは間違いない。使いこまれたフルーだ。品質は自分の支払い、あるいはファイアウォールの支払いに相応しいものだってことだろう。どうしてかって？ あの組織にとっての俺は、半分に折れたら再生ビンに放り込む安上がりの精密機器でしかない。恐怖があまりにも過酷になるかファイルの破損が多すぎるか知り過ぎてファイアウォールが消そうと判断するまでかの命で、その後は人類を保護しようと別の抜け作がやってくる。人類を保護。なんてファンタスティックな。ファイアウォールの宣伝文句みたいなたわごとだ！腕の力が尽きたので脇におろす。力がまだ戻っていない。あと数分は身動きできない。

医療室から出ようとした皮質処理員が、身動きしようとするか弱い挑戦を見て笑う。「何を急いでるんだい？ リラックスだよリラックス、床に倒れたら自分で起き上がるまでそのまんまだよ。新米のお守をする給料は貰っていないんだ」奴の軽薄な態度は慰めにもならず、また憂鬱になってくる。

俺の意識の一部でなくなった経験とは、どんなものだったのだろうか？ 空前絶後の大興奮かもしれない。真の美を見出した？ 恋に落ちた？ 何かにひらめいた？ 誰かの命を救った？ それを知ることはないだろう。そうした記憶、そうした人生、そうしたバージョンの俺は失われた。この安置台に横たわっている新しい俺は、こうした経験を経していない。失われた物の重みで、胸が虚ろな気分がする。

思考プロセスを変えよう。

どうでもいい。楽しいことも新情報もなかったんだろう。くだらない二週間だった。それは間違いない。死ぬほど退屈だったんだ。叙事詩ものの心痛に傷つき苛まされていたのならもっといい。無意味に死んだんだ。ヤクをやりすぎて、どこかの床に倒れてシャブ漬けの興奮で心臓が破裂したんだ。ステーションの廊下裏で質の悪いブラック・マーケットXPをつかまされてちんけなスカム生まれに身ぐるみ剥がれたんだ。そんな時間が消えて嬉しい。むしろサイコーだ。どうでもいい。どうだろうと知ったことか。そんな二週間なんて必要ない。

でもこうした考えは嘘だ。そんな二週間が必要なんだ。それがなければ自分が欠陥品みたいな気がする。それどころか、たとえ犠牲が一時間だとしても完全じゃない気がする。知らなきゃいけない。

何が起こったかは、誰かが知っている。間違いない。おそらくファイアウォールのプロキシ、中でも一番知ってそうなのはジャスパーだ。今回のコネは奴だった。それはよく憶えている。消したのは奴の命令だろう。それに俺たちセンチネルを消す時のプロキシは、素早い動きをする。必死で築いたレプスコアがあっても、任務の結果が俺みたいな外部のごろつきに持たせるには危険すぎるとファイアウォールが判断したら、記憶の消去は防げない。仕事が行われている限りは。人類が保護されている限り

は。

なんてクソな取引だ。

俺の人生は、それもいくつもの俺の人生は、どうしてこうなったんだろう？ いつも他人の手に握られている。

また心配、またパノイアだ。振り捨てろ。組織には「疑わしきはシロ」と言わざるをえない。俺も何十年とセンチネルをやってきた。何百万人も救ってきたと思いたいが、確信はない。

組織を信用しているか？ ノー。しかし理解とある程度の敬意はある。だが歳月を重ね、ギャップがより長くより頻繁に訪れるせいで、ファイアウォールは俺に対する保護なんてどうでもいいと思っているんじゃないかと疑い始めている。

そこで突然ミュージズが目覚め、陰鬱な物想いを破る。視野に幾つもの内視ディスプレイが表示され、メッシュ接続がやっとオンラインになるとともに診断ルーチンを繰り返す。カレザの慣れ親しんだたおやかな声が心に響く。

「おかえりなさい、サヴァ」

その声は、母親に抱っこされているか恋人に抱きしめられているかのように心地よい。和声アップグレードに投資した甲斐があった。カレザはその使い方をよく学んでいる。自分のミュージズが単なるAIだと思うことはめったにない。今では、唯一の本当の友達だ。カレザはこうした感傷を分かち合ってくれるだろうか？ そうした想いを告げたことはない。自分だけのものにしていく。反応が怖いんだ。

ああカレザ、戻ってきたんだな。

「一杯飲みたそうね」

わかってるなカル、俺自身よりもな。

「今施設に注文したところ。少し、10分くらい待って」

ありがとう。カレザは俺の脳がほろ酔い気味の時の会話を楽しんでいる。いつも俺に飲ませようとする。

「どういたしまして、サヴァ。そうそう、あれから二週間が経ってるわ。前の袖に起きたことについての情報は何もないけれど、今いるのは、ルナ軌道上の『セラルディ4』。着用しているモーフは小規模な改造を施されたコアコーポブランドのフェリー。彼らはもうすぐオンラインになる予定よ。そうそう、カップはタイタニアンズが優勝したわ」

ちっ。そのためなら殺しだしてしまおうさ。配当はいくらに跳ね上がった？ だがカレザが情報を手に入れる前に検索を停止した。待った。いや、知りたくない。知ってもイライラするだけだ。神経のエネルギーが体中でうずき始め、いつもの濃い味が舌を覆い始める。煙草が欲しい。

「ええ、そうね。そのモーフの前の持ち主はヘビースモーカーだったわ。今回、その習慣を絶つのは難しいかも」

今度の再着用ではどんどん調子が良くなっていく。煙草は嫌いだ。深酒ならいい。アルコールは制御できるが、煙草を吸うといつも嫌な気分になる。依存症のあるモーフを着用した時はいつも、そいつを絶つのに苦労する。俺が強烈なニコチンへの渴望を抑えようと必死な間も、カレザは報告を続ける。

「@レブは無事ね」

初めてのいいニュースだな。少なくとも、この二週間で

味方に迷惑はかけてなかったってことか。

「そうね。ラティについての最新情報を知る覚悟はある？」

俺はラティを愛している。誰よりも優先する恋人だ。彼女は二年前に姿を消した。何の説明もなく。その痛みは今も残っている。

とりあえず後回しだ。

「わかったわ」

ニュース配信をスキャンしろ。過去二週間の大事件をチェックしろ。関わっていたかもしれない出来事のヒントがあるかも。

カレザがスキャンといつもの状況報告を続けるのを聞きながら、新しい袖に注意を向ける。立ち上がるだけの筋力がやっとな身についた。モーフを前に押しやり、足を床におろす。体中にけいれんが起きる。新しいモーフに順応するには、いつも多少の時間がかかる。幸い、コアコーポ・フェリーは何度が着用したことがあるから慣れている。何度も履かれて手入れも悪いが、必要とあらば歩道を歩くのに使える古い靴みたいな感じだ。左の足首が少し痛む。様子を見るために少し上げる。少し腫れている。着用がらみの異形症じゃないのは確実だ。恐らく古傷だろう。厄介事の一つだが、品質は支払い相応だってことだ。右腕の力こぶを囲むナノタワーは女性型快樂ポッドのアソコに全身で潜り込むスリセロイドをフルアニメで描いたもので、スカムの基準でも野卑で醜悪だ。こいつを描いたのが誰だろうと、一流の彫師に違いない。俺としては目立つ特徴は嫌いだ、やはり、きれいなモーフを買う金がなければ品質は支払い相応ということだ。

倒れないようにして台から降り、恐る恐る左足首に体重をかけてみる。痛い、折れる様子はない。

左足首用のパッチが要求してくれ。ブタなんか良さそう

「フェニルブタゾンね。今用意中。あと30秒くらいで届くって。ニュース配信のスキャンでおかしいのはなかったわ」

やっばそうか。

再着用者覚醒室なら標準装備の全身を映せる鏡へとゆっくり進み、新しい自分の姿を見るために覆いを外す。俺のカクテルを手にした皮質処理員が出入りに立ち止まって俺の肉体で目の保養をしているのに気付く。俺の目には保養にならないが。

「飲み物をもらえる？」奴の存在に気付いたそぶりすら見せずに、奴の方向へ手を伸ばす。すると奴は部屋に入り、近すぎるぐらいに密接してカクテルを渡される。息が、何か酸っぱいソーセージみたいな臭いをしている。

「シーツの下は悪くないね」奴は言う。「作業の前にも見たんだけど、正直、安置台じゃ映えなかった。そうして立っていると、体のラインがとても魅力的だ。顔はそれほどじゃないけど、おっぱいが・・・」

胆汁がこみ上げる前に話を遮る。「申し分ない。それは知ってる。さあ、面の皮を剥いでそれを鞭にしてとことんしばかれる前に口を閉じてすっこめ」奴はメッセージを受け取って部屋からコソコソと退散する。

ナイスなおっぱいな。

「プロポーションで定義するなら、確かにナイスね」

ああAI、いつだってフォーマル。

「いつもの固有感覚よりも4センチ背が高いから、頭をぶつけないよう気を付けてね」

はいはいありがとさん。

「ひどい言い草ね」

自覚ならあるぞ。ミュージズをからかって気分が明るくなるにつれ、顔が微笑み方を学んでいく。新しい顔の感覚をもっとつかもうと、鏡を見ながら笑みを広げようとする。歯を見せる。ニコチンのシミだらけだ。カクテルを多めにすすり、アルコールを一巡りさせる。血液があつという間に酒に反応するのが感じられる。目を閉じてため息を漏らす。この平穏があと少しだけでも続けば。

「お客さんが来たわよ」これだよ。全くついてない。

誰だ？

「今回のファイアウォールプロキシのジェスパーが、ベータレベル・フォークを送ってきたわ。話をしたくて待ちきれないみたい」

つないでくれ。

奴らは放っておいてくれないのか？ 公式には、ファイアウォールなんてものは存在すらしていない。奴らの触手が俺を縛り貫いているのは、ラティのせいだ。火星でのゴタゴタ一件。それが全ての始まりだった。前はラティを見た。奴らが俺に残してくれた知識はそれだけだった。でもどうして？ その日までの俺は、この宇宙が本当はどれだけ怖い場所なのか、理解していなかった。いや、「怖い」じゃなくて「恐ろしい」だ。あれほど広大で無慈悲な存在に、他の言葉はない。人類が完全に消し去られても、何事もなかったかのように何も変わらない。恐ろしい。真に理解を越えた存在に直面した時の感情は、そうとしか説明できない。そもそも、虚空に潜む存在の行いどころか、人類の同族に対する行動ですら、他の言葉では要約できない。多分それが理由なんだろう。教訓を学ぶため。はっきり言うとも真相の認識がどれだけ簡素だろうとそれで充分だから、絶対忘れないだろうし組織への協力も止めないだろう。

ジェスパーのフォークが視界内で形を取る。

「おかえり、サヴァ」

この野郎。俺が欠落を抱えて目覚めるのが嫌いなのは知ってるだろうが。

「すまない。それについては何もできなかった」表現は真剣で心配しているが、仕草を見ればこの上なく冷静なのが分かる。なんて事だ！ クソツタレのプロキシはパニックらない。奴らは全てのカードを持っているし、危険に身を晒すこともない。

まあそうかもな。要点に入ろう。俺に戦闘用モーフを着用させたのは休暇のためじゃないだろうから、何か大きな問題があるはずだ。バークとピヴォとサルロはいるのか？

「ああ、みんな同じ施設で再着用した」

少なくともチームと一緒にいるわけだ。頼れる連中。一定の範囲内ではいさ。

いいとも。詳しい話を聞かせてくれ。



ピヴォはステーションの滑らかな外壁を八本の足全てでしがみついている。真空服の腕の先に付けられたナノ磁石でしっかりと保持していなければ、宇宙の深みへと果てしなく漂流していただろう。フェースプレート越しに頭上の暗い宝珠をずっと見つめている。

地球。

視線は不吉な雲を透かし、生命のない黒い大洋に釘付けになっている。その太古の深淵で泳げればと思う。宇宙で生まれ育った彼には、かつての生態的位置に身を沈めた経験はない。今後も、地球の海水に飛び込む機会はないだろう。今の地球は疫病のデストラップと化している。骨だらけの荒地だ。

<大崩壊>の前、先祖が知性などという邪魔ものに煩わされることなく、青い海原を泳いで珊瑚の迷路をたやすく通り抜けたり海流に身を委ねてゆったりと漂ったりしていた時代を想像する。ひょっとしたら、現在の黒い海水の奥底では今でもタコが生き延びていて、少数ながらもなんとかやっついて、機会を待ち続け、地球が奪還されるその日まで血を絶やさず、そしてその暁にはピヴォも加わり、全ての知識を捨て去って本能の生き方に戻るかもしれない。

そこで浴びせられたレーザー光線を探知した真空服のセンサーが、ピヴォの空想を中断させる。サヴァからの視界レーザー・リンクによる接触。隠密性が求められる任務で好まれる通信手段だ。ミュージズがメッセージを処理し、サヴァの声が頭の中に響く。

「何か問題があるのか？ 止まったままなのはなんで？」

「景色を愉しんでただけだよ」返信する。

「降りるときに何時間でも愉しめ。歩哨ポットに見つかる前にステーションに入れ」

返事なんてしない。サヴァと議論しても無駄だ。弁解したって始まらない。ステーションの外郭をまた這い始めた。ステーション自体が、地表へと続いている長くて黒いカーボン・ナノチューブ製のケーブルと繋がっている。ただ一つ残った宇宙エレベータだ。

<大崩壊>でこのステーションを崩壊させた内部での爆発で発生した、金属製の外殻に細い傷跡として残る裂け目が見つかる。サヴァの言った通りの場所にあり、サイズは説明と完全に一致している。人間の赤ん坊がかろうじてすり抜けられる大きさの隙間だ。サヴァによると、この外殻の金属で作業をしていた自動修復ナノシステムが、裂け目の修復を終える前に故障したという。サヴァがファイアウォールから引き出してのける任務詳細の細かさは、時々怖いくらいだ。一瞬パラノイアが心を覆うが、すぐに

サヴァ・ファイアウォール・エージェント
秘密作戦の専門家、フュリー・モーフ

ピヴォ・ファイアウォール・エージェント
ナノテクの専門家、オクトモーフ

ジェスパー・ファイアウォール・プロキシ。サヴァのコンタクト

疑いを振り払い、頭足動物の肉体を圧縮して裂け目に滑り込ませる。

暗闇の中で赤外線発信機を起動させ、通常の視野スペクトルでは見えない光を部屋に放つ。強化された目に、生命のないステーション内部が赤外線の不気味に変色して照らし出される。これなら暗闇の方がまだだったに違いない。ずっと前の空気漏れで水滴が高速凍結した結果、表面の至る所に氷の結晶がきらめいている。冷たくなった人間の死体の群れが、外殻の金属の塊の隣で、ゼロGで死の舞踏を踊っている。部屋の奥への道を開くために金属や肉を軽く押しやりながら、残骸と死体の間を進む。無言の叫びに大きく口を開いたまま顔を凍らせた女の頭部が、ゆっくりと漂ってくる。切断された首からは無事な皮質スタックがぶら下がっている。スタックを取り出そうと思ったが、死せる魂の回収に来たわけではない。代わりに、腕の二本を伸ばして頭を下方の床に押しやる。〈大崩壊〉の多くの犠牲者と同様に、彼女もここで忘れ去られたままになるだろう。

エアロックまでは問題なしに辿り着いたが、運がいずれ尽きることは分かっている。遺棄されたステーションでハイパーコーポの防衛者と遭遇するのは避けられない。既にセンサーがその存在を感知している。ボットがここを包囲するのは時間の問題だ。それ(まず避けられない)よりもエアロックを開いてチームの皆がステーションに侵入するのが先だと願うしかない。

エアロックは中から溶接されていた。こうした事態への備えはあるが、それで防衛ボットに見つかるのは確実だろう。しばし心を落ち着かせ、目の前の作業に集中し、そして真空服の腕の一つに組み込まれているプラズマ・トーチを点火する。熱く激しい青い花火が部屋中に散らばる。一秒一秒が、今や一番貴重な財産となる。

内部ドアを貫く寸前で、ミュージが受動型のテラヘルツ・センサーからの警告を伝える。ピヴォの位置へと物体が急速に移動し、わずか20メートル先にまで接近している。「最初のドアはほぼ完了」トーチの位置を乱さないためにありったけの根性が必要だったが、冷静に通信を送る。「見つかっている。気を付けて」「了解」サヴァが返事した。

やっとな封鎖を切り裂き終える。切り裂かれたばかりでまだ燻っている金属の間に4本の腕を滑り込ませ、力を入れてドアを枠から引っ張り出す。外れたドアはゆっくりと部屋に漂い、端はあっという間に冷たくなっていく。エアロック内部のドアは溶接されていない。安心の吐息を大きくついて、ピヴォの腕8本の全てがエアロックのドアの手動コントロールへと狂ったように躍りかかる。

「あと数秒、あと数秒でいいんだ」だがその数秒が尽きる。

全方位視野で、背後に警備ボットが移動したのが見える。ボットは武器をただちに発射し、浮遊しているエアロックのドアで跳ね返される。ボットはドアまで前進し、激しい勢いでドアを脇に押しやる。ドアが結晶構造の壁面とぶつかって激しい音を立てる。エアロックのドアを開けるための最後のレバーを引くと同時に、激しいプラズマの炎に包まれた。



サヴァは、エアロックの扉が開いたら即座に神経薬物を注入するよう、カレザに命令していた。ミュージによる投与は成功。サヴァの変化した脳には果てしなく遅いスローモーションのように感じられる世界で、チームの荒事担当であるバークが鋼鉄の足で繰り出したキックにも助けられて、エアロックのドアが内側に開く。一瞬の判断でサヴァの照準レーダーが内視ディスプレイを起動させて二つの目標、ピヴォと歩哨ボットをロックオンする。ロボット番犬は既に武器を向けていたが、サヴァの方が早かった。網膜に焼き付くプラズマの炎がサヴァの武器から噴出し、ピヴォの腕の一つを焦がして歩哨を直撃する。二射目がボットの背中中の装甲をぶち抜いて内部の重要な部品を溶かし、ボットを動かない溶けた廃金属の山に変える。

サヴァは悪態をつくオクトモーフのそばを素早くすり抜け、煙を上げているボットにもう二射を叩き込む。「クリアー」サヴァが発信する。「一つは倒したが、絶対にもっといる。それは間違いない。ピヴォ、大丈夫か?」「交接腕が黒コゲだよボケ」語尾に覆い被せるように、ピヴォが怒りに満ちた不平を返す。「じゃあ次回はボットを放つとこうか?」サヴァはサルロに声を向ける。「サルロ、ここに来て必要な端末を探せ。バーク、ハッカー坊主がビットを処理する時間を稼ぐから、ここで陣地を作る必要がある」

ピヴォは真空服を切断して傷ついた腕を切り離し、真空服が急速に修復して穴を埋める間に小声でサヴァに悪態をつく。

「心配するなって。あと7本あるだろ。そもそも、子作りしたいほど魅力的ってわけじゃないし」サヴァはピヴォをからかうのが好きだ。人生の本当の愉しみの一つってわけだ。

サルロは、落ち着きながら優雅に、壁から壁へと部屋を飛び回る。そのネオテニック・モーフは平均的なヒューマンの子供の袖よりも細く小柄で、彼の「好み」に合うよう完璧な強化とカスタマイズをされている。そのためには一財産が必要だった。そのヒューマン青少年の袖への偏愛は誰にも理解されていないから、たとえ経費がファイアウォール持ちの時でも、強化ネオテニックを再着用するためにいつも自腹を切っている。そして無尽蔵と思える個人資金がどこから来るのかもみんな知らないし、知りたがらない。少なくとも、彼が自分の仕事をこなす限りは。

サルロの後から二体のミニドローンが続き、周囲を赤外線でも照らしながら他の波長を能動的に走査している。「今向かってる」チーム・メンバー各人のオーバーレイに内視マップを送信しながらサルロが言う。「もうすぐ、100メートルかそこらだよ」マップにハイライトされた経路が表示される。

サヴァとピヴォはサルロのすぐ後ろに続き、バークは装甲女性型殻で遅れまいと一生懸命だ。

サルロ：ファイアウォール・エージェント
ハッカー、ネオテニック・モーフ

「遅れるなよ地表人、もうすぐ重力井戸を降りるからな」サヴァがバークに言う。

「すぐとは思えないけど」バークが応える。

放棄されたステーションは不気味に静まり返っている。ずっと昔の暴力と絶望の痕跡が残ったところに残っている。漂うデブリ。引き裂かれ凍りついた死体。焦げ跡と歪んだ金属。ここは死の封土だ。

チームは制御ステーションに到着し、サルロとピヴォがステーションの停止中のシステムに取り組んでいる間、サヴァとバークは廊下に陣地を組む。

「なんてこったい！ 任務情報が本当に正しかった。ステーションのシステムは生きていけど休眠中だ。ここを防衛していたのが誰にしる、システムを破壊しないで、宇宙エレベータを再起動させる余地を残しておいている」サルロはシステムをハックするための手順を機嫌良く開始する。

「一体どこの馬鹿が、灰まみれの球体に降りる危険を冒そうってというの？」バークが呟く。

ピヴォが注目してもらおうと腕を振る。「故郷の惑星を奪回するのは素晴らしいアイデアだと思っているのがここにいるって、忘れてないかな？」

「反動思想よ、そんなの」バークが反論する。「昔の国民国家の忠誠心を全て脱ぎ去るってのは、人類史でも最大の進歩だった。過去の栄光を懐かしむのはバイオコンに任せておけばいい。あたしは結構、広大な宇宙へと歩みだす未来の方がいいからね」

「政治の話はやめよう」サヴァがバークに言う。「お前が無政府主義者なのは知っている」それからピヴォにいう。「そしてお前は奪回派だ。それも構わん」そこでチームの内視レーダーに幾つもの素早く動くドットが浮かび、サヴァのおしゃべりは中断される。「探査が来る。サルロ、まだか？」

「作業中。くそ、うまくいかない」サルロの子供っぽい声にいら立ちがこもっている。

「急げ。今度のボットが重装備なら俺たちはお終いだ」サヴァとバークは、ボットが角から姿を現す前からそれぞれの廊下に制圧射撃をばらまく。ボットは一瞬だけ接近を止め、廊下のカーブを遮蔽に取る。レーダーにもっと多くのボットが登場し、最初のボットの位置へと移動している。

「もう時間が無い、サル！ ボットが集まってくる！」サヴァはカーブへともう一度制圧射撃をする。バークは撃たず、ボットが廊下に進入するのを待ち構えているが、ボットは待機している。ボットが合流し、更に多くがレーダーに姿を現して同じ位置に移動している。

「もうお終いよ！」

「ご覧ください皆さま・・・」そして最後の操作を終え、サルロはステーションのセキュリティ・システム全体の支配権を手に入れる。

突然、ボットの一つが別のボットに武器を向ける。また別のボットがそれに続く。あっという間に、ボット同士のバトルロワイヤルが発生し、廊下がガスとデブリだらけになる。

サヴァとバークは武器を降ろし、サルロの作品が立てる音に聞き入った。

「流石だなサル！ お前が太陽系でも指折りのハッカーだってのを見せてもらったぞ！」

「ショタは伊達じゃないわね！」

「エクストロピアでも最新のAGIに侵入プログラムを書いてもらえれば、大抵のことはこなせるさ」

サルロは穏やかで冷静にふるまっているが、その表情を見たサヴァにはこれがとてつもないことだとわかる。ネオテニックの小さな心臓がドラムのように激しく波打っていたのだ。だが毛も生えていないタマを潰すのはやめにして、サルロに脚光を浴びさせておくことにする。危機一髪だったのは確かだし、次も運がいいとは限らない。

サヴァは静かな余韻をもう数秒残し、それからチームを仕事に戻らせる。「サルロ、エレベータを起動させるのにどれくらい時間がかかる？」



ピヴォは出入りに留まって、煤だらけの雲層を抜けて眼下の地上に降りて行くのを眺めている。もう大気圏内で、炭素ナノチューブ製の建築上の偉業、地球と頭上のステーションの間にピンと張られた豆の木を降下中だ。エレベータ・ケーブルをよじ降っているシャトル・カーは、廃墟の惑星へと迫っている。

地球の大気は、今では錆色の濃い粉塵にまみれている。地表を吹きすさぶ風は強烈で、場所によっては危険に渦巻いている。地球の天候系は、人類がティターンズというはぐれAIの一群と戦争になったということになっている<大崩壊>によって、取り返しがつかないほど壊れてしまった。爆弾や業火に化学兵器や生物兵器に貪欲なナノスウォーム、そして核すら使われ、その痕跡を刻んでいった。今では、核の冬に囚われた住みにくい場所だ。奇妙な形に変形し、強風にも負けず、身をよじるかのような動きすら見せる雲もある。自己複製型空中ナノスウォームの活発な末裔だと、ピヴォは思う。他のどんな、AIの戦争機械の生き残りから発達した怪物が、眼下で待ち受けているのだろうか？

地球は今では封鎖されている。敵に明け渡したのだ。ティターンズがこっそり建設したワームホールを通じて太陽系から逃げてからもう何年もたっているはずだが、奴らの道具と武器が大量に残されている。同様に、人類がAIに対して、そしてかなり頻繁に同じ人類に対して放った武器も、野放しだ。だから地球は放棄されて封鎖され、去ろうとしたり訪れたりしようとするものは何であれ撃ち落とすハイパーコーポのキラー衛星が軌道に配備されている。

奪回派であるピヴォは、地球への帰還を主張する小規模ながらも有力な勢力に属している。地球にはまだ希望があると、彼らは信じている。地球は今でも耐えているのだから、諦める時間なんてない。地球は浄化とテラフォームによって再び人類の故郷にならなければならない。だが奪回派は少数派だった。<大崩壊>の生き残りの殆どにとっては、地球には辛い記憶が多すぎた。生活が崩壊

した。愛する人を失った。自らの命すら奪われた。地球は、人類の傲慢さと過ちの証だった。どんなに進歩してもどんなテクノロジーがあろうと、あるいはそれゆえに、人類は平気で自滅するということを不気味に思い出させる存在だった。

もちろん、だからと言って誰も挑戦しないわけではなかった。廃品漁りは今でも地球の廃墟を漁り、長い間失われていた宝物や文化的秘宝、脱出し損ねた人物の精神の保存体すらも回収している。奪回プロジェクトを自分で始めるためのベースキャンプを設立しようと独自の秘密ミッションに着手する奪回派もいる。その殆どは消息を絶ったが。

4人のチームはシャトルの広いオープン・ラウンジで休憩しながら装備の準備をし、サヴァとサルロはバイオモーフがしばらくの間でも真空服を使わなくても済むよう、空気注入型の窮屈な救命バブルに入っている。ピヴォはバブルに入らずに真空服を着たままでいることにした。降りる間サヴァと密接する気にはなれなかったのだ。ラウンジの壁にはずっと昔の血にまみれていて、その血は今、減圧客室で水晶のような茶色に凍りついている。このシャトルに乗って破滅した地球から逃げだした乗客が誰であれ、狂気や絶望に駆られて乗客同士で暴力沙汰になったに違いない。

「何が起こったんだろうか？」サルロはその考えを皆に向けた。

「何？」ピヴォが応じる。

サヴァがすぐに割り込んで、サルロが始めようとした議論を終わらせる。「哲学もドラマもやめろ。俺がそいつに我慢ならんのは知ってるはずだ」サヴァは、秩序と他人事だと言う荒々しい雰囲気を保とうと必死になる。過去とく大崩壊で死んだ何百万人もの運命に心を奪われるのは、あまりにも簡単だった。そうならないよう、サヴァは常にキツイ物言いをする。「静聴。任務内容は全員が知っているな。人探した。運び屋。多分死体だろう。生前で最後にわかっている居場所は、この便が止まった時に降りるベース・ステーション。キリマンジャロ山。現地は、極めて信頼性の高い情報によると、殺戮ボットに一度制圧されていて、奴らは多分今でも近くにいる」ドラマチックになるよう、続ける前に一息おく。「運び屋からはブツを回収する。どんなブツかはわからん。組織にとって極めて貴重ってことだけだ。わかっていることだけにこだわる。もしとかだろかなんてたわごととは聞きたくない。考えが任務から逸れても、そいつは自分の内にしまっとけ。聞きたくない」その宣言の後には、誰もが自分の思いに閉じこもって一言も発することなく、キリマンジャロ・ステーションへの旅は静かだった。



シャトルが暗い洞窟型ハンガーの中にある停留所へとガタゴト音を立てて到着する。かつてのキリマンジャロ・ハンガーは、毎年何百万人もが利用する世界一忙しい宇宙港だった。今では、ピヴォがシャトルの窓にひっついて光のない空っぽのハンガーを眺めているように、まるで命の

ない真空のようだ。

「準備ができたら言って」とサルロはサヴァに送信し、シャトルのドアをハックして開けてむっとした埃まみれの地球の大気をチームに漂わせる準備を整える。ハンガーからシャトルの中に赤灰色の埃があつという間に吹き込んで視界を塞ぐ。

サヴァのキリマンジャロ・ハンガーに最初の一步を踏み出すと、そこに子供の骨の脆い胸郭があった。踏み砕かれた骨が破片や粉と化す。シャトルのエアロックの周囲の床全体に、ぼろぼろになった服をまとった骸骨が散らばっていた。踏まずに通る道は見当たらない。他のメンバーも、一人ずつエアロックから歩み出る。

「ここは墓場ね」バークが全体に送信する。

「惑星全体が墓場だ」サヴァの応えには、墓場だという言葉が発された後もずっと尾を引く余計な残響が伴い、ピヴォに至ってはそれが不安なあまりミューズの対抗措置で頭の中に響く残響を即座にシャットダウンした。

サヴァは更に数歩踏み進み、そして足を止める。チームの残りはそれに続いた。

「何かがおかしい」サヴァは骨の一つを蹴る。骨がグシャリと砕ける。「頭蓋骨が見当たらん」

「強制アップロードさ」サルロが発信する。「ティターズ of 機械はスキャンするために死体の頭を狩り集めていた」そして肩をすくめる。「ま、僕の推測だけけど」

「喋るな！」サヴァはチームに沈黙を命じる。「これが聞こえる奴はいるか？」

近くで低い機械音が響き渡る。「確認した」ピヴォが答える。「少し北の方。約30メートル先」ピヴォの観測に反応したかのように、別の音が、こちらはチームの背後にあるハンガーの南端から響き始めた。音は近づき、より明確に、そしてより激しくなる。

「まだ目には見えない。埃が濃すぎて、チャフみたいになっている。赤外線でも20フィート先しか見えん！」サヴァは右に動くようチームに合図した。「離れず、ゆっくり動いていつでも撃てるようにしとけ。乗客用ラウンジはすぐ東だ。そこから搜索を始める」今ではどの方角からも音が響き、視界のすぐ外を漂っている。

「何コイツ？」空を飛び先端に回転鋸を付けた関節腕を六つ持つ昆虫型ボットが埃まみれの暗闇からバークに襲いかかり、彼女は床に伏せてプラズマライフルを撃つ。ボットが骨とぼろの山にぶつかって引火する。炎は、乾いた布の間であつという間に広がる。ハンガー・フロアの火災によって、周囲は炎の熱いオレンジの輝きで照らされている。別のボットがバークに跳びかかり、回転鋸の腕を荒々しく閃かせる。バークの射撃が外れる。ボットはバークの頭にぶつかり、回転鋸を首筋に当てる。金属と金属がぶつかり、至る所に火花が飛び散る。彼女はライフルを落として鋸が首から離れるようボットの体を引き剥がした。「走れ馬鹿！ あたしがカタを付ける！」

サヴァは発砲してボットを撃墜し、それから東へダッシュし、広がっている腰の高さほどの火を飛び越した。「ラウンジに行け！」

ピヴォは二つの腕で自分の体を持ち上げてサヴァに続



いて走り、残った腕五本を頭の上でバタバタと動かしている。「**なんてこった、どけどけ!**」サルロは足の遅いオクトモーフを追い越し、炎の中を突っ走ってラウンジに向かう。バークは狂ったボットを燃え盛る骨の山に放り捨て、急いで駆け出し、骨の欠片と埃に包まれてボットの群れに猛追されながら皆の後を追う。

最初にラウンジに辿り着いたのはサヴァで、玄関は開いていた。ライフルを構えて背後を向き、ドアの枠を遮蔽に取る。サルロとピヴォは炎を超え、バークが徐々に追いつき、その背後にボットがいる。サヴァは火傷したサルロの頭越しに援護射撃を放ってボットをまた一体仕留めるが、群れの残りが動じたようには見えない。何をやっても止められない。突然、別のボットがラウンジのそばの狭まり続いていた暗がりから登場した。

「**増えた! 挟撃だ!**」サヴァは新手のボットを足止めしようと銃を撃つ。サルロは玄関まであと30フィートというところで骨のもつれに引っ掛かった。まだ幼い肉体が、埃と死体に頭から倒れ込む。ピヴォはそれを飛び越す会心の大跳躍をやったのけ、床を滑ってラウンジの外壁のドアのすぐそばにぶつかる。サヴァは手を伸ばしてオクトモーフを掴み、安全なラウンジに引っ張り込む。バークは足を止めてサルロを助けようとしたが、勢いが強すぎる上に埃だらけの床では足場が悪すぎた。巻き上がった埃とバラバラになった骨とボロボロになった服の中で前転し、挙句の果てに戸口にいたサヴァと衝突する。

三人のチーム・メンバーがラウンジに辿り着くと、ちょうどサルロが立ちあがったところをボットが彼の頭を捕まえるところだった。機械が横から二本の腕を伸ばし、それから回転する刃でサルロの首に切り込む。鋸の刃が肉と骨をえぐってほんの数秒で首を切り落とし、サルロの目が見開いて肉体がピンと張り詰める。首が胴体から切り離されるが

早いか、ボットはそれを回収して炎を超えて闇に包まれたハンガーの反対側へと飛び去った。

サルロの首なし死体は何秒か揺れ、それから倒れ、噴出する血が長くだらけた軌跡を描いた。

■ ■ ■

ピヴォもサヴァもバークも無言だった。ハンガーにいる恐ろしい存在が入り込まないようにラウンジへの玄関を何とか塞いだ。玄関の外からは今でも、首狩りボットが浮遊し、時々閉じたドアに刃をぶつけたり削ったりする音が聞こえる。

ついにバークが沈黙を破る。「**あいつらがサルロをどうするかなんて、絶対に考えないようにしているわ**」

「**もっと考えるな。生存率が低いのは参加した時にサルロもわかっていた。みんなそうだ**」サヴァは立ち上がる。

「**あいつに言うべきかな? 再着用した時にさ**」そんなことを言うとサヴァが怒るのは分かっていたが、ピヴォは気にせず思ったことを言う。

「**それが親切か残酷か、どっちだと思う? そもそも、俺たちの誰かが生き残るとい保証はない。なら誰が気にするってんだ? 最後のバックアップを取ったのがいつだろうと、お前もその後の体験を失いたくないだろ? 移動するぞ**」

■ ■ ■

サルロがいなくなったので道案内役はピヴォが引き継ぐ。運び屋が最後に確認された場所である企業 VIP ラウンジまでもうすぐだ。

頭のない骸骨とミイラ化した死体だらけの暗い廊下を進



む。かつて、この建物を守っていた企業部隊がAIの戦争機械によって蹂躪され、中にいた全員が容赦なく皆殺しにされた。壁には戦闘による傷痕があり、乾いた血で覆われている。ホールにはAIの戦争機械の残骸も散らばっていて、長い負け戦の中で人類が納めた数少ない勝利を永遠に物語っている。スクラップの山になってすら、機械は不気味だった。

「回収作戦じゃなかったのが残念ね」バークが言う。「自治主義派ならこのテクから何か発見できたかも。少なくとも、ハイパーコーポがこれで何をやろうとしていたかは」

長い大通路に入ると、掃除されたかのように死体と残骸が突然消える。

「奇妙な熱映像解析がある。パターンがおかしい」ピヴォが発信する。

「何が言いたい？」サヴァが応える。

ピヴォが「わからない」と思い浮かべる前に、彼のミュージックが背筋の凍る警告を発する。「**ティターンズ製と推測される高度に発達した設計の正体不明のナノボットが大量に、ナノセンサーで発見されました。対応措置を開始します**」

「ナノスウォーム。動け！ 動け！」ピヴォは二本腕で全力疾走しながらあわてて発信した。サヴァとバークは何も言わずに後に続く。ティターンのナノスウォームの危険は全員が知っていた。ピヴォが時々作る、特定の目的に対して製造され自律性も知性もないナノボットと違い、このナノスウォームは全自動で自己複製が可能で適応力を持ち必要なものは何でも製造できる。こうして逃げている間にも、スウォームのそれぞれが持つナノセンサーが三人を計測し、そのモーブと装備についての詳しい情報をスウォーム内部で送信している。

前方に、狭いトンネルへと続く通路への分かれ道が見えてきた。トンネルの目の前で、突然ピヴォが立ち止まる。

「進まないで！」後の二人がそこに追突する。

「何だ一体！？」サヴァはホールを振り返る。「こうして

喋ってる間もあのスウォームに追い付かれるかもしれないんだ！」

「僕のミュージックがここで熱エネルギーの噴出を検出した。スウォームが何かを企んでいる」ピヴォが警告する。

「でも何もないじゃない」バークがそう言いながら、手をトンネルの入り口に入れて振る。すると突然その金属の手が、手首から切り離されて床に転がる。

「単分子ワイヤーだ」状況はますますまずいことになっているというのに、ピヴォは非人類ナノテクの独創性に感銘を受ける。「ドアに張り巡らされている。通るものは何でもスッパリ。でも伸張強度は低いから、多分その手で引きちぎったんだ」

「手詰まりね。認めなきゃ」バークは切り落とされた手を拾い上げる。ホールの向こうでは、ナノボットが融合するにつれてナノスウォームが明確な形を取り始めている。スウォームは霧状に凝縮し、じわじわと近付いてきている。バークは言葉を続ける。「多分、この港全体がこいつだらけ。アタシはもう役に立たない。既にモーブ全体に侵入していて、診断結果がおかしくなってる」

「何が言いたい？ もう手遅れなのか？」サヴァが発信する。

「そう、もう手遅れ」バークはうんざりしたように首を振る。「このナノのせいであたしが何に感染しよう、どうでもいいじゃない。きれいなバックアップに戻りたい。こんなことを忘れてね。その気なら走り続けて。時間を稼げるかどうかやってみる」バークはホールの方を向いて霧へと真っすぐ走っていく。あっという間にナノスウォームが彼女を包み、分解が始まる。バークがピヴォとサヴァから少しでも遠くへと走るにつれ、その金属製の骨格の形が崩れ始め、ナノスウォームの跡をかすかに残す。

「動け馬鹿！ 遊びでこんなことするんじゃない！ また今度！」それから数分後には、バークの信号が途絶えた。



サヴァとピヴォはVIPラウンジに入る。かつて宇宙港が蹂躪された時、ここは人類最後の拠点だった。入ってすぐ目の前の床に、積み重なった保安要員の骸骨が散乱していた。骨の山のそばには壊れたバリケードの黒コゲになった残骸が散らばっている。引き裂かれて焦げた民間人の服を纏った骸骨が、まるで部屋の真ん中にある死神か何かからできるだけ遠ざかろうと必死だったかのように、壁と角に集まっていて、場所によっては三層にも四層にも重なっている。

ピヴォが、運び屋が左の肩甲骨に埋め込んでいるはずの無線タグを捜索する作業を始める。発信に対して3メートル以内から返事が届いた。ピヴォは長い腕を伸ばして小さな骨の山を指す。「運び屋はそこにあるよ」

サヴァは骸骨三体の山に近寄って骨の物色を始め、大腿骨を全部引っぱり出したり折ったりする。「全く煙草が欲しいぜ。全部このモーフのせいだ。煙草は吸わないって言わなかったか？ なのに連中は、いつもいつも、煙草中毒のモーフに再着用させやがる」サヴァは一束の骨をピヴォに渡す。

「それは災難だったね。ナノスケール・エッチングからのスキャンは数分で済むと思う」ピヴォは作業に取り掛かる。

「一服したけりゃ、その時間はあるよ」

「ああ。面白いな。お前を埃で磨いて火を起こそうか？」ピヴォの含み笑いを聞きながらサヴァは床に腰を下ろす。

死んだ運び屋は、誰であったにしろ、発信するには危険すぎる情報を託されていた。ティターズズの傍受力や解読力の限界は誰にもわからなかったから、運び屋はメッセージをナノサイズの文字で刻んだナノボットを大腿骨に直接注入されていた。ところが、彼は地球を脱出できなかった。彼のメッセージは届かなかったのだ。

ピヴォもサヴァもそれがどんな情報なのかは見当もつかなかったが、ファイアウォールの誰かがそれに確保する価値があると考えていたのは明らかだ。多分ティターズズについての情報だ。でなければどこかのCEO家伝の Pastaソース・レシピか。

「これだよ」ピヴォは大腿骨を一本サヴァに渡し、残りを床に放りだした。

「なんて書いてある？」

「知らない。あんま知る気にもなれない」ピヴォは大腿骨を差し出したままだ。

「ドラマは充分だ。ナノで読ませる。データのコピーが必要だ。それを持ちたくないなら俺が持つ」

「それは助かるよ」ピヴォは記述を解読するようナノボットを設定する。解読が終わったら、情報は直接サヴァに送信される。ピヴォは知りたくなかった。

「さて、これからどうする？ ここからどうやって出る？ ここからは引き返すしかないし、そいつは自殺行為だ」ピヴォの肌の色は乳緑色からほとんど藤紫色に変わっている。無力感に浸り始めるといつもそうだ。

サヴァは躊躇せずに応じるが、発信ではなく口で語ることを選んだ。「出るつもりはない。やってみる気すらな」サヴァはプラズマ・ライフルを持ちあげてピヴォの楕円形の

頭に向ける。「それじゃまたな、イカ公」サヴァは引き金を絞り、プラズマの激しい一撃でピヴォはばたつく腕を下敷きにしてピクピク痙攣する血塗れの黒コゲ軟骨と化す。サヴァが骨の山のそばに座って壁にもたれる間も、広がっていく血の海の上で腕がのたくっている。

サヴァは煙草を取り出して火を付ける。最初の一服はほとんど絶頂モノだった。サヴァは煙草を気にいった。

煙を吐くと、カレザが話しかけてくる。「プロジェクト・オズマに連絡する？」

「そうだな。あの女につないでくれ。」

カレザの穏やかな声とは全く違う冷たくて厳しい女の声が、サヴァの頭に入ってくる。「配送の準備は出来ましたか、エージェント・サヴァ？」

「場合によるな」サヴァはもう一服する。

「最初の交渉では説明が明確でなかったのかもしれませんが、あなたの選択肢は限られています。おそらく地球を生きて出られないでしょうし、この情報を失うわけにも、あなたの組織の手に渡すわけにもいきません。最後まで契約を守り、そして私たちも契約を守ると信用していただく必要があります」

「彼女の居場所を今すぐ明かすか、でなければあんたらの大事な情報も道連れだ」

女が再び発信する前に、しばしの間隔があった。「しかるべき報いがあるのは分かっていますね。あなたにもラティにも」

「まああるだろうな」煙草はフィルターの部分まで短くなっていたのでサヴァはそれを骨の山に放る。「それでどうなるんだ？」

「契約を締結してからの駆け引きはしません。ご自由に。そして私たちも自由に対応します」女との接続が途切れる。

サヴァは立ち上がって運び屋の大腿骨があった場所まで歩き、それを拾い上げる。ピヴォの鮮血で覆われている。サヴァはそれをぬぐってしっかり見つめられるように持ち上げる。

「悪いカレザ。荷物は情報のみ。エゴは置いていけ。」

「了解」

思念の一閃で、サヴァは皮質スタックの緊急遠投射機、ごく微量の反物質で動く使い捨てのニュートリノ発信機を起動させるよう、カレザに命じる。サヴァの頭が爆発して部屋中に散らばり、運び屋の大腿骨も爆発に巻き込まれる。だが、大腿骨に記録されていた情報は宇宙の裏のそのまた裏を通して殆ど一瞬のうちに放たれ、太陽系のどこかにあるファイアウォールの専用受信機でしっかりと確保される。

■ ■ ■

「日付は？」

言葉が新しい声帯を穿ち、渴いた喉から絞り出される。再着用から数分間はいつもそうだが、今度もぶつきら棒な口調になった。言葉はざらついて不明瞭なつぶやきだったが、声の音程は高い。間違いなくバイオモーフで、今度の性別は女だ。最初の数秒でもこれくらいはわかる。